

第二十五話 七宝焼 しっぽうやき

伊吹おろしが肌をさすように、とんものうえを渡つて いぶき はだ わた
 いく。安政三年の正月がすぎで、ここ、服部村（富田町 あんせいさんねん しょうがつ はとりむら とみだちょう
 服部）にも再び静けさが戻ってきました。村の鎮守の はとり ふたた しず おま ちんじゆ
 日溜りには子守のあんねと幼い女の子がお手玉遊びを ひだま こもり おさな おんな こ てだまあそ
 しています。そのあたりを遠島村（七宝町）の庄五郎と とおしまむら しっぽうちょう しょうごろう
 いう男が小走りに、野道をいそいでいきました。庄五郎 おとこ こばし のみち しょうごろう
 は背中に小間物を背負い、この辺の村々を行商する人 せなか こまもの せお へん むらむら ぎょうしよう ひと
 です。今日は服部村の常吉つあんのところへいくつもり きょう ほとりむら つねきち
 でした。
 土地の人たちから、常吉つあんとよばれる人は梶常吉 とち ひと つねきち ひと かにつねきち
 といつて尾張藩士梶市左衛門（一説では市右衛門）の おわりはんしかじいちざえもん いっせつ いちうえもん
 二男坊でしたが、十七才の時からこの服部村に住んでい になんぼう じゅうひちさい はとりむら す
 います。その後、泥七宝といつて、いわゆる今日の七宝焼 ごん どりしっぽう しっぽうやき
 の元祖になった人です。 がんそ ひと

先程より、常吉つあんは縁側でじつと腕をくみ、考え
 こんでいます。というのは遠島村の庄五郎がきつと、今日
 も尋ねてくるにちがない。それは七宝焼の製法を伝授
 してくれということ。しかし、常吉つあんは去年の暮
 れから、再三、再四の庄五郎からのたのみに、うんとい
 わなかったのです。

そのわけは七宝焼がお百姓の手なぐさみで作られる
 ようになると、粗製乱造の出来の悪い品が沢山でき、値打
 ちがさがる恐れがあったからです。

常吉つあん自身も、かつて殿中で、オランダ人から七宝
 焼の皿をみせてもらってから、そのすばらしさにとりつ
 かれてしまいました。まず、釉薬の秘法をたずねるため、
 七宝焼の皿をみじんにくだいて、なんとかして薬の成分
 を知ろうとしました。薬の成分がわかると、それを売っ
 ている薬種屋を探しださねばならないというように、そ
 れは苦心の毎日でした。

そんなわけで、常吉つあんは今まで頑固として庄五郎の
 願いをことわりつづけていたのです。だが、常吉つあん

にも、一つ、泣きどころがあつたわけです。それは自分が
 こんなにもして苦心して得た技術を、そのまま秘法とし
 てしまえば、技術の練磨がなくなり、発展もおぼつかな
 いということですよ。

実は、常吉つあんは内緒で、下萱津村の人に七宝の技術を
 伝授している弱味もあり、一方、熱心な庄五郎の日参に
 もほどほど感心して、どうしたものかとなやんでいたわ
 けです。

そこで、一案というのは梶家に入りにする大工に耳打ち
 して、常吉つあんより直接でなく、孫の佐太郎（一説に
 は、二男）から庄五郎が技術を教わることです。

「よし、きめた。」と、常吉つあんは立上がりまし。形
 の上では一子相伝は残りしましたが、かくて七宝の技術が
 隣村にも伝っていく糸口ができたわけです。

梶常吉宅址は、はとり中学の北側にあります。

テキスト使用は、編集者の山田寂雀氏の許可を得ています。

梶常吉宅跡（服部二丁目）



かじつねきち やしきない しっぽう やきば
梶常吉の屋敷内に七宝焼場があ
ったようですが、現在は、別の
げんざい べつ
せいさくじよ
製作所になっています。

香炉と数珠（吉津三丁目）



まつした しょうみょうじ かじつねきち つく
松下の正明寺には、梶常吉の作
しっぽうやき こうろ じゅず ほぞん
った七宝焼の香炉と数珠が保存さ
れています。

梶常吉墓碑（吉津三丁目）



まつした しょうみょうじ てら
松下の正明寺には、このお寺の
だんと かじつねきち ほひ
檀徒だった梶常吉の墓碑もありま
す。